

《2015 年春期・GW》 計 20 名分

【昭和大学】

お忙しい中、お時間割いて頂きありがとうございました。回復期のリハを見せていただいたり、クルズスをやっていたり、在宅医療を見せていただいたお陰で、リハのイメージが以前より鮮明になりました。リハ科は自分の大学にはないのですが、リハ科にとっても興味が出てきました。

昭和大学病院のリハ科と藤が丘リハ病院を2日間にわたり、見学させていただきました。旗の台では急性期、藤が丘では回復期のリハを見せていただきました。

自分の大学にリハ科がないので具体的に何をしている科なのか見学する前はわからなかったのですが、見学を終えてリハ科のイメージが鮮明になりました。他職種との協力体制はリハ科が1番なのではないかと感じました。また、在宅医療も見ていただき、昭和大学は地域に密着した病院であると感じました。

また、機会がありましたらリハについて詳しく教えてください。

【佐久総合病院】

急性期患者の診察、装具外来などの外来診察、カンファレンス、心リハ、がんリハ、作業活動など実際の訓練の様子、嚥下造影検査、テクノエイド、リハ看護、回復期病棟などを見学させていただき非常に充実した実習を行うことができました。リハとは何か、リハ科医の役割を知りたいという私の希望から見学実習が主体でしたが、起き上がり介助やシミュレータを用いた運転訓練の体験もさせていただきました。またご多忙にもかかわらず、見学の前後で患者さんの状況、リハの意義、リハ科医の役割などについて、担当していただいた医師、セラピスト、看護師の方々から丁寧に説明いただき勉強になりました。テクノエイドの説明では、リフトなどの補助機器が看護師、介護士の負担軽減だけでなく、早期離床や早期退院など患者の利益につながることに驚きました。リハ看護や回復期病棟の見学では、患者の安全を確保しつつ患者の自立を促すような病棟づくりの難しさを教えていただきました。回復期リハの治療においては看護の役割の重要性を強く感じました。

リハ科で実習を行って、リハは真に全人的医療の実践であり、その達成にはチーム医療が不可欠であるということを強く感じました。リハは疾病のために生じた障害を専門的に扱う点で他科と異なりますが、単に機能障害を元に戻すというのでは無く、自宅に帰って生活する、職場に復帰する、趣味を楽しむといったように同じ障害であっても人により治療の目標が異なります。治療目的達成のために患者に対してだけでなく、住居や職場への介入をすることがあります。まさに全人的医療だと思いました。チーム医療については、職種それぞれの専門性、能力も重要ですが、チームで患者の情報を共有することの重要性

を強く感じました。リハ科では治療の達成指標として ADL を評価しますが、訓練で身につけた「できる ADL」ではなくて、病棟で患者が行っている「している ADL」見なければいけないということを先生がおっしゃっていました。治療に対する先生方の意識の高さを感じた場面であったのですが、回復期病棟において「している ADL」を見ているのは主に看護師です。また患者と毎日長く接しているのはセラピストの方々です。彼らの持っている情報は多岐にわたり、その情報を共有して治療に当たることがチーム医療であるということカンファレンスなどを見学して感じました。

【金沢城北病院】

石川勤労者医療協会 金沢城北病院および上荒屋クリニックにて合わせて1日間、リハビリテーション科専門医および理学療法士のお仕事を見学させていただきました。

城北病院ではリハ科医のお仕事を紹介していただきました。リハ室や回診などを見せていただいて感じたのは、リハ科医がとても幅広い疾患をフォローしている、ということでした。脳血管疾患から整形外科的疾患と内科外科問わず、リハビリを必要とされている患者を受けとめており、非常に頼もしい存在であるに違いありません。同時に科を超えた幅広い知識や経験が必要であるため、医師の負担が大きいのではないかと感じました。

昨今はドクターGというTV番組が人気であるように総合診療医といった generalist に注目が集まっているが、急性期における generalist が総合診療医であるならば、慢性期における generalist がリハ科医であり、医療においての非常に重要な役割を担っていると思いました。

上荒屋クリニックでは理学療法士によるリウマチ患者の検査を見学させていただきました。まず感じたのが、問診と検査が同時にスムーズに行われている、ということでした。必要かつ十分な情報を聞き出し、それに合わせ検査もされておりました。自分は現在医学部4年で、問診だけでも満足にすることができず頭を抱えている状態であるため、余計に理学療法士の姿に驚きました。また、患者とのコミュニケーションが円滑であることに気づきました。問診のなかに双方のキョリが縮まるような何気ない会話が盛り込まれており、能力の高さをまじまじと感じました。

大学でリハについて学ぶ機会があまりなく、見学前はリハ科医の仕事の理解が浅かったのですが、今回の見学を通じて少しではありますが仕事ぶりを見ることができ、リハ科医ってこんな魅力があるのか、と新たな発見もありました。また機会がありましたら、様々な現場でのリハ科医の仕事ぶりを見学させていただきたく思います。

貴重な機会を設けてくださった城北病院の関係者の皆様、ありがとうございました。

【新潟大学医歯学総合病院 総合リハビリテーションセンター】

二日間、大学病院とN病院の実習に参加して、それぞれの病院の特色を肌で感じるとともに、そこで働く人々、そこに来院する患者さんの姿を間近でみることができ、本当に勉強になりました。

先生方には見学だけでなく、患者さんと話す機会を与您いただき、リハ科医が患者さんの生活に密着していることをより実感することができました。

その中でも、先生と患者さんのとの会話や触診などは、私の思う医師の理想像そのものであり、それだけでなく、少しでも患者さんのQOLを向上させようと、福祉のパンフレットを利用しながら相談にのる姿にはとても感銘を受けました。

これらの経験が、私の将来の医師像の素地になったことを、今、実感しています。そして、私はリハ科医の道に改めて魅力を感じたと同時に、先生のような医者になりたいと思いました。素晴らしい医師になれるよう、これからしっかり勉強しようと思います。

2日間、ありがとうございました。

【JCHO 東京新宿メディカルセンター】

・これまで学ぶ機会の少なかったリハ科に接し得るところが大きかった。具体的には、リハ科医が計画を立てることでそれぞれの職種が働きやすくなることを知り、チーム医療が組織的に実行されていることに感動した。職種による分担の内でも特に看護師が、入院中の日常生活に近い位置からリハの効果を評価するという重要な働きを担っていることは私にとって新しい知識であった。患者さんの退院後の生活に医療者が介入する場面を見学させていただけたことも良かった。リハ科医にとって一番大事な場面は面談であると聞いたことが印象深く、患者さんを意欲付け、見通しを伝え、支えることがリハ統括の土台だと教えていただいた。リハは患者さんを長期的に診るため、急性期医療に携わる中でリハを学ぶことは難しい。しかし高齢化の中でリハの重要性は増すばかりであるから、今回のように学生の内にリハを知り、考える機会をいただけたことがとても有難かった。

・この度、貴院リハ科を見学させて頂き、様々なお話を伺うことができましたことは、私にとって大変意義深いものとなりました。1日と短い時間ではありましたが、リハ科施設見学から始まり、レクチャーや病棟回診、外来など、とても濃密な時間を過ごさせていただきました。

リハに関してのレクチャーでの、FIM（機能的自立度評価表）、二木立先生の脳卒中片麻痺患者最終自立予測のお話は、とても興味深いものでした。リハ科において、患者一人一人の状態を客観的に評価・点数化し、予後を予測する、という方法があることを初めて知りました。その数値化された予測が、患者さん自身のリハに関してだけでなく、退院後の生活に向けての自宅の準備や、家族・介護者の心構えといった事柄に大きな意味を持つと

いう所に、非常に魅力を感じ、もっとその内容を学びたいと思いました。

病棟回診では、一人一人の患者さんの状態を丁寧にプレゼンテーションしてくださり、様々な疾患とそのリハの流れなどを学ぶことができました。また、歯科口腔専門の回診も見学させて頂きました。元々リハにおける口腔ケアについて興味を持っておりましたので、口腔ケアと予後の改善などのお話も大変勉強になりました。

装具外来の見学では、直接患者さんのお話を伺う機会を頂き、ADLの改善に装具がどれほど有用であるかを間近で感じることができました。

何より、1日を通して強く感じたのは、リハ科は様々な分野の専門スタッフが一つのチームとなっているということです。先生方が病棟の看護師の方々、リハ室のスタッフの方々とお話する姿、暖かい雰囲気がとても印象に残っています。

・自分がリハ科に興味をもったきっかけは、大学での外科の病院実習で、術後の患者がリハ科の先生の支えでどんどん歩けるようになっていき、嬉しそうにしていたことです。患者の社会復帰のためにできることをしていく仕事に魅力を感じ、リハ科がどのような仕事なのかもっと詳しく知りたいと思い、医学生セミナーに参加しました。

セミナーでは、患者が自立して生活できるように、患者の身体のことだけでなく、家族構成や住宅環境まで考慮して話を進めていくところに感銘を受けました。単に疾患だけではなく、その背景にある生活上の課題まで考えていくリハ科のあり方は、まさしく全人的医療で、医師になる上で大切な姿勢を学ぶことができました。

【藤田保健衛生大学 七栗サナトリウム】

<医学生>

・脳卒中の片麻痺患者に対して、実際にどのような訓練を行っているか知ることができた。グループワークではリハ科医の考え方の一端を理解できた。患者や家族の方と話す機会があって貴重な体験だった。

・診察をすることで、授業で学んだことを実際に感じられたのがよかった。嚥下食はどれも美味しかった。とろみの必要性を学ぶことができた。

・身内で神経内科やリハビリに関わっている人が多いので、興味をもって参加することができた。嚥下内視鏡では実際に挿入した際の感触や、向きを変えるタイミングなどを学ぶことができて貴重な体験だった。リハ科の仕事や、患者の気持ちの理解を深めることができた。

・装具体験では、装具や義肢を使用してリハをする必要性を感じる事ができた。ロボット体験はゲーム感覚でレベルも色々あって、健常者である自分たちでも難しく感じたが、今までのリハのイメージとは大きく異なっていて驚いた。移乗介助では、重心移動を上手く利用することが難しかった。リハ科医という仕事が患者のその後の人生を支える仕事だ

と知って興味が湧いた。

・実際に患者を診察し、麻痺のある方の身体の動きがどのようになるかを見られてよかった。バランス訓練ロボットでは、実際にリハで使われている様子を見てみたかった。

患者様のご家族様が明るく話されている様子が印象的だった。

・ポリクリでは体験できない様々なことを体験できてよかった。

・リハ科医が患者にどのようにアプローチしているのか実際に見ることができてよかった。どのくらい細かく指示・処方をするのか知りたいと思った。患者に提供する食事も、嚥下能力に応じて考えなければならないのだと感じた。

・嚥下内視鏡にて、食物を嚥下する一連の流れを見ることができ、印象的だった。嚥下食の中でも、見た目など食欲をそそるように工夫しているのだなと感じた。実際の医療現場にて心がけていること、患者が感じていることなどを見聞きすることができ、貴重な体験だった。

・リハについて学んだことが今まで無かったので、どの内容も新鮮だった。実際に体験してみることが大切だと再確認できた。嚥下食は美味しくないと聞いていたが、美味しかった。ただし普通の食事と形が異なるので抵抗を感じる患者の気持ちを感じることができた。リハ科医は、幅広い疾患を診察し、患者との距離が近く、患者の人生をサポートする仕事だと知って、魅力を感じた。

<医師>

・ロボットや装具を実際に体験することで大変勉強になった。リハに今まであまり積極的に関わる機会がなかったため、生の現場を見ることができてよかった。

・普段脳神経外科医として関わっていると見ることのない視点が多かった。患者様の奥様が「七栗サナトリウムにきて初めて人間として認めてもらった」と話されていた言葉が印象的だった。今後、回復期リハを中心にリハ科医として再出発したいと考えているが、非常にためになった。

・リハ科医としての考え方や処方の出し方、患者の診察の仕方など全てが新鮮だった。リハロボットはゲーム感覚で楽しく続けられる点が素晴らしいと思った。生活を考えるリハ医の視点はとても魅力的だと感じた。

・実際に病院にて患者と触れる機会を通して、リハの重要性を感じていた。リハ科医の具体的な考え方、業務内容など詳しく知ることができて有意義だった。今後も折を見て勉強させて頂きたい。